地域のインフラとなる居場所

～必要な場所なら　みんなで支えあおう～

公益財団法人　かながわ生き活き市民基金

目　次

◆はじめに　吉村　恭二 …… 1

◆必要な場所ならみんなで支えあおう
～福祉たすけあい基金助成団体による居場所活動実践事例～

報告１　NPO 法人ワーコレたんぽぽひろば（茅ケ崎市）　塩原　香織さん …… 3
ー 地域のホッとスペース「たんぽぽはうす」ー
報告２　NPO 法人宮ノマエストロ（横浜市泉区）　永瀧千恵子さん …… 7
ー 多世代交流スペース「宮ノ前テラス」ー
報告３　NPO 法人結の樹よってけし（愛甲郡清川村）　岩澤　克美さん …… 11
ー 人口 3000 人の小さな村のささえあい ー
報告４　コミュニティカフェ 6 丁目クラブ　（鎌倉市）　廣瀬　和子さん …… 15
ー 放課後クラブ！プロジェクト ー

◆パネルディスカッションより
地域の実践から　地域のインフラとなる居場所をめざす …… 19
居場所のミッション・人・もの・おかね・情報

◆フォーラムその後 ～ 4 団体の活動の進展～（2019 年 8 月 30 日開催座談会より）…… 24
報告１　第 2 の居場所「古民家カフェよってけさん」9 月 20 日オープン　岩澤　克美さん …… 25
報告２　一人暮らしの高齢者のための「寄り道ランチ」がスタート　廣瀬　和子さん …… 27
報告３　小学生、不登校児の親子がありのままで過ごせる居場所に　塩原　香織さん …… 29
報告４　多様な企画で地域・行政への発信力を強める　永瀧千恵子さん …… 31

おわりに …… 33

フォーラム概要

開催日　2019 年 1 月 26 日（土）　**場　所**　オルタナティブ生活館　スペースオルタ
主　催　公益財団法人かながわ生き活き市民基金・フォーラム実行チーム
フォーラム実行チームメンバー：塩原香織・永滝千恵子・岩澤克美・廣瀬和子・並木りつ子
後　援　生活クラブ生活協同組合、公益社団法人神奈川県地方自治研究センター、
一般財団法人神奈川県地域労働文化事業団
協　賛　神奈川県労働者福祉協議会、かながわ教職員組合連合、
公益財団法人横浜ＹＭＣＡ、一般社団法人ソーシャルコーディネートかながわ
神奈川県生活協同組合連合会、扶桑電機株式会社、早川運輸株式会社

はじめに

～市民の関心を集め、参加・協力による居場所づくりに取り組む～

公益財団法人かながわ生き活き市民基金
理事長　吉村　恭二

人々が心の安らぎや安堵感を求めて居場所を探し、そこに集ってくることのできる場を提供する市民活動が盛んになってきつつあることは一つの時代的傾向であるかもしれない。その一つの活動が「子ども食堂」であるかもしれないが、最近は子どもに限らず高齢者を含め全世代に門戸を開放して様々な取り組みをしている団体がある。私共基金が資金助成をする活動組織もその数を増してくる傾向にあるようであるが、今回そのうち地域は異なるが、同じ志を持ち活動を展開している団体の代表が、それぞれが持つ課題、展望などを語り合う機会を持ったこと、しかもそのうちの一つ「清川村」に足を運び、活動の現場で語り合うことができたことは意味深いことであった。

清川村で「結の樹よってけし」を運営する岩澤克美さん、鎌倉市で「コミュニティカフェ６丁目クラブ」を運営する廣瀬和子さん、茅ケ崎市で「たんぽぽひろば」を運営する塩原香織さん、横浜市泉区で「宮ノ前テラス」を運営する永瀧千恵子さんがその顔ぶれであった。共通していることは、それぞれがしっかりとした行動力をもち、かつ楽しんで活動していることである。

一般論であるが、コミュニティ運動を進めていく段階で、運動のきっかけを作りだし、集団運動を主導的に導くような集団をつくることが必要となるといわれる。これを「イニシアティブグループ」と呼び、その意味は二つあり、「始動集団」という意味と、運動を中心になって導くという「主導集団」の意味である。どういう集団が「イニシアティブグループ」になるかはその地域の住民によって決まるが、大切なことは、次第に多くの住民を巻き込むという順序を取ることである。次に、この集団活動がメンバーたちの利己的な利益の追求にあるのではなく、地域社会のすべての人の地域に共通するものを持っていることが表明されていなければならず、そういう評価を受けるような集団であること、また「問題の発掘」つまり開発計画の実行に必要な問題を発掘すること、さらに日常的な生活欲求、新しい社会への価値を求める意欲など、人々が個別に抱いている欲求を集めたり、共通のものにしたりするという仕事をすること、それを「関心の重合」とか「関心の共通化」と呼ぶことにする。そのように集めた関心を集団活動の目標にすること、つまり「集団目標化」を図ることである。

居場所を作り出していく過程で、「なぜ居場所なのか」を改めて問い直し、より多くの住民の関心や協力を集めることが課題である。そのためにも今の時代になぜ「居場所」なのか共に考え、地域社会に発信することが必要であると考えさせられた一日であった。

改めて簡単に私見を述べると、大きくとらえると日本社会を覆っている「分断現象」、核家族化の定着による少子化、孤立化、高度に発展を遂げてとどまることを知らない高度情報化社会、その帰結としての人と人とのコミュニケーションの貧困化、情報収集の機器はごく普通の一般市民の手にするところとなり、かつ幼少年期からそれに親しむことによる感情、情緒の貧困化、人間関係の希薄化による対人間関係発展能力の劣化など、枚挙にいとまがない多くの課題、問題に取り囲まれて日々の生活を送っている。「居場所づくり」を目指す各団体がそれぞれの地域でこれらの活動をそれぞれの言葉でなぜ活動が必要なのかの問題意識と目標を明示し、協力者の参加を呼びかけることが大切である。同時に我々財団としてもこれらの活動を各団体の責務とするのではなく、幅広く地域社会に呼びかける仕事を自らのものとしていく必要を感じさせられた次第である。

「ホッとする場所」「心が休まる場所」「楽しい仲間と過ごせる場所」は特定の人だけのものではなく我々に等しく必要とされる「場」であり、活動に参加することを通してそれに気づく契機となるのではなかろうか。

改めて、岩澤さん、廣瀬さん、塩原さん、永瀧さん、本当にありがとうございました。

報告１　　必要な場所ならみんなで支えよう

～福祉たすけあい基金助成団体の実践から～

地域のほっとスペース「たんぽぽはうす」（茅ケ崎市）

報告者　NPO 法人　ワーコレたんぽぽひろば
理事長　塩原　香織さん

子育て支援を通して人と人との関わりを育む

私たち NPO 法人ワーコレたんぽぽひろばは 2003 年に「お母さん達が子育てを支えあえる場を作りたい」と始まった団体です。「子育て支援は親支援」を合言葉に、子育て当事者の目線で保育事業・ひろば事業を行ってきました。

核家族化、少子・高齢化が進む中、地域のたすけあい、支えあいの仕組みが崩れてきていることを保育の現場からも強く感じていました。地域でお母さんも子どもも心豊かに生活をしていくためには「片側からの支援では、その場しのぎの解決方法にしかならないのではないか」「おたがいさまの関係性をつくること、たすけあいのしくみづくりこそが問題解決に繋がるのではないか」とメンバーでの議論の末、「子育て世代を中心に、多様な世代が日常的に触れ合える場所と機会を提供しよう」と地域に根ざした、誰もが安心して集える新たな居場所作りを始めました。

保育事業を柱に地域にひらかれた場づくりをめざす

「たんぽぽはうす」は昔ながらの家屋と新興住宅地が混在する地域の中にあります。保育士集団である私たちの特徴を活かして、保育事業をメインに、併せてひろば事業を行い、地域のニーズを探りながらの新たな出発となりました。

保育事業として、一時預かり保育「たんぽぽルーム」で生後 2 ヶ月～就学前までの保育を行っています。「美容院に行きたい」「のんびりお買い物をしたい」など、預ける理由は問いません。茅ケ崎をもっと子育てしやすいまちにしたいとの思いから、子育て支援という活動を通して、人と人との関わりを深めながら子育てを支えていきたいと考えています。保健師等行政を通じての依頼もあり、就業のみならず、産後うつなど子育てに困難を抱える家庭からの保育ニーズが増加していていることを感じています。

「ふりーすぺーす　たんぽぽひろば」は赤ちゃんからお年寄りまで、どなたでも利用できるみんなの居場所です。月 2 回のランチの提供も行っています。昔ながらの畳敷きで座卓を囲むと、知らない者同士も親せき同士のような雰囲気です。利用者のみなさんにも施設にはないあたたかさがあり、落ち着くと好評です。

学校の長期休みには、小・中学生のフリースペースを数回開催しています。みんなで食事をつくって食べたり、地域の方から仕事のお話を聞くなど、生活の場を共にしながら繋がりあう場を提供しています。

当事者同士がつながって困りごとを解決する場

「たんぽぽカフェ」は、不登校児を抱える親同士が繋がりあい、情報交換できる場がほしいと始まった会です。ある日、わが子が不登校になってしまった。なぜ？どうしたら・・・と悩んだり戸惑ったり。そんな時は一人で悩まずに、ここでお茶を飲みながら、同じ思いを抱える仲間たちと悩みを分かち合いませんか？と始めました。親のみならず、長年引きこもっていた子が「たんぽぽはうす」の改修の手伝いに顔を出してくれたり、不登校児を抱える親の声を聞きたいと家庭教師など関心のある大人も集う場となっています。「たんぽぽはうす」が人々の楽しみや生きがいを生み出す場であるとともに、人と人との結びつきによって困りごとも地域で解決する、互助が生まれる場にもなっていると実感しています。

支援する側・される側の垣根を越えて

開設から 3 年。手探りで始まった「たんぽぽはうす」は支援する側、される側の区切りなく、集う人たちが繋がりあい、支えあい、つくりあげる場となっています。これからもそんな垣根のない場を継続し、ともに見守り支えあえる豊な地域作りに繋げていきたいと考えます。

これから居場所をはじめるみなさんへのメッセージ

「小さな思いをあきらめないで」

どんな小さな思いも小さな種になります。
あきらめないで

たんぽぽはうす　　塩原佳織

地域のホッとスペース「たんぽぽはうす」基礎情報

居場所名
地域のホっとすぺーす たんぽぽはうす

運営主体
NPO法人ワーコレたんぽぽはうす

主な事業活動
保育事業、ひろば事業

所在地
茅ケ崎市香川３－４－５

開設日
2017/12/1

開所日
月曜日～金曜日
（お盆・年末年始・国民の祝日はお休み）

会員数と月会費
26人
年会費1000円

スタッフ数(有償)
26人

ボランティア数(無償)平均
3～5人

地域連携団体
香川自治会
地域包括支援センターあかね
香川駅前子育て支援センター
茅ケ崎市保健所
家庭児童相談所

地域の特徴

若年層の流入が多い茅ヶ崎市は待機児童も多く6歳児未満の核家族世帯が増加傾向にあります。
また、高齢者のみの核家族も増加しており保育や介護共に家族だけでは支えきれない状況に市としても新たな支え合いの仕組みつくりの必要性について政策提言しています。
香川地区はそんな若年層と高齢者の核家族が混在する地域です。

開設の動機・目的

私達は親子のひろばを開催する中で、困った時にたすけてと言える人が身近にいないといったたお母さんたちの声を聞き、核家族化・少子高齢化が進む中で地域の中でできていた助け合い、支え合いの仕組みが崩れてきていることを強く感じました。保育士集団である強みを生かし子育て世代が安心して子育てできるよう理由を問わず利用できる一時預かり施設、また、困りを地域で解決していく互助が生まれる場として赤ちゃんからお年寄りまで誰もが集えるコミュニティーを作りたいと考え開設しました

収　入（年間）

事業収入　上位3事業
保育・ひろば事業　3,995,163円

会費収入
正会員年会費　27,000円
寄付収入
助成金・補助金　2,287,208円

バザーなど　138,810円

支出(年間)

家賃　1,566,224円

水光熱費　117,263円

人件費　1,705,027円

広報費　14,078円

器具備品費　480,617円

その他

初期投資と資金調達

出資　1,311,192円

寄付

補助金・助成金
一時預かり補助金　1,580,000 円
ひろば補助金　90,000円
生き活き福祉基金 517,208 円
WCO基金　100,000円

一緒に活動する仲間作り

自分たちの住み暮らす地域を豊かにするため活動する仲間が集ったワーカーズコレクティブです。
賛同してくれる人たちを巻き込みながら活動を広めています。

報告２　必要な場所ならみんなで支えあおう

～福祉たすけあい基金助成団体の実践から～

多世代交流スペース「宮ノ前テラス」（横浜市泉区）

報告者　NPO 法人　宮ノマエストロ
副代表　永瀧　千恵子さん

近所のお年寄りの居場所　和顔施「和み庵」

私は「宮ノ前テラス」を始める前に、和顔施「和み庵」を運営していました。その私がどうやって「宮ノ前テラス」を作っていったかをお話します。

2012 年、母の介護のため訪問介護ヘルパーの仕事を辞めた私は、ある日、母所有の空き家を片付けながら「まだ使える。もったいない。ここを母も喜んでくれるような皆の居場所にできないか」と考えました。私自身も母を看ながら地域とつながれる場所が欲しかったので、その空き家をこつこつリフォームし、2016 年 5 月に一人で和顔施「和み庵」を開設しました。「和顔施」とは、にっこりと相手に話しかけ笑顔をあげるという意味です。

オープンすると母の友人を中心に、近所のお年寄りが訪ねてくるようになりました。「宮ノ前テラス」は現代のおしゃれなカフェ風なのに対し、「和み庵」は昭和レトログッズに囲まれた昔の縁側で、茶飲み話をするような居場所です。来た人が折り紙や編み物、麻雀等、思い思いに楽しんでいます。私はいつもただ一緒にいて、話を聞いているだけです。

信頼できるメンバーとの出会いで「宮ノ前テラス」に向けて発信

母の担当の民生委員さんと、その方が紹介してくれた区役所の保健師さんに「和み庵」を始める相談したところ、二人もそういう居場所ができたら嬉しいと言ってくれました。その民生委員の女性と、和み庵オープン初日一番にお母様を連れて訪ねてこられた男性と、そして区役所窓口でたまたま先ほどの保健師さんに「地域のために何かお役に立てることはありませんか？」と相談に来た女性、私の 4 人が繋って、「宮ノ前テラス」のコアメンバーが誕生しました。その男性から「所有している空き家を取り壊して建物を新

築するから、そこを使って」との夢のような提案があり、一気に盛り上がってそこに交流スペースをつくることにしました。子育て中のママたちにも加わってもらったのをきっかけに、子育て世代にも孤独を感じている人がいることを知り、多世代交流の居場所をめざすことに決まりました。

資金調達のため区役所で紹介された「ヨコハマ市民まち普請事業*」に挑戦したことで、私たちのやりたいことが明確化し、強い信頼関係が生まれました。また泉区の地域支援チーム（区役所・区社協・地域ケアプラザ）の心強い協力も得て 2018 年 9 月「宮ノ前テラス」をオープンしました。また家賃などの継続的な資金調達のため、横浜市介護予防事業を 2018 年 10 月から始めました。

テラスの建物は 2 階建てで、2 階には学童保育所が入っています。その子どもたちとの交流も楽しみの一つです。また「ミヤー」という地域通貨があり、ボランティアをしてくれた子どもに渡して小さな社会参加を知ってもらっています。ヨガや健康講座も人気で、ランチ・カフェ・子ども食堂にもたくさんの人が来てくれるようになりました。

団地でのたすけあい活動が現在の居場所づくりに

私が地域に関心を持ったきっかけは、以前 20 年間住んでいた大きな団地にあります。そこは新しい住民ばかりだったため、皆の意見が届きやすく、福祉に重点を置いた街づくりをしていました。体の不自由な子どもを団地の狭い浴槽に入れるのは重労働と聞いて、地域ケアプラザの浴室を夕方借りて、ボランティアが子どもたちの入浴介助することもありました。近隣の特別養護老人ホーム 5 施設との交流も盛んに行われ、団地内ショッピングモールの買い物付き添いボランティアや、敬老の日には小学生（孫）、私たち（子）、施設のお年寄り（老）の 3 世代が 1 組となり、『孫子老の日』といってショッピングモールや公園を散策したり、お弁当を食べたり楽しい時を過ごしました。このような交流イベントはたいへん喜ばれました。

地域の人たち皆が、弱い立場にある方をサポートするボランティア活動に積極的に携わり、介護保険スタート以前からホームヘルプ活動・デイサービスが活発に行われ、そこで私はたくさんのことを学びました。そんな経験が「和み庵」の立ち上げ、多世代交流スペース「宮ノ前テラス」にもつながったのだと思います。ご清聴ありがとうございました。

＊横浜市地域まちづくり推進条例に基づく支援策のひとつとして、市民から身近なまちの整備に関する提案を募集し、２段階にわたる公開コンテストで選考された提案に対し、最高５００万円の整備助成金を交付する。

これから居場所を始めるみなさんへのメッセージ

「笑顔が人を幸せにしてくれる」

居場所に入ってきたときみんなが嬉しくなれる
ような笑顔をいつまでも大切に

宮ノマエテラス　永瀧千恵子

「宮ノ前テラス」基礎情報

居場所名称
宮ノ前テラス

運営主体
NPO法人　宮ノマエストロ

主な事業活動
地域食堂・子ども食堂の運営
レンタルルーム・ボックスの貸出
子育てサロン、イベント企画の実施　学習支援

所在地
横浜市泉区中田東4-59-41

開設日
2018/4/3

開所日
2018/9/9

会員数と月会費
14名　　年会費1,000円

スタッフ数(有償)
0名

ボランティア数(無償)平均
1日平均3名

地域連携団体
中田連合自治会　　泉地域活動ホームかがやき
踊場地域ケアプラザ　　泉区中田地区社会
福祉協議会
泉土木事務所（公園管理等調整）
泉区役所中田地区支援チーム（総合事業窓口）

地域の特徴

テラスのある中田地域には、昭和40年代に宅地化が進み　その頃から住んでいる高齢者と平成11年の地下鉄開通に伴い賃貸住宅が増えそこへ越して来た子育て世代が暮らしています。
しかし交流はほとんどありません。先祖代々の農家も多く農業も盛んだが、高齢化に伴い後継者不足で休耕地が目立ってきています。

開設の動機・目的

ここに来ればいつも誰かがいる、何か楽しい事がある、美味しい食事が食べられる、そんな居場所が出来る事により　高齢者が引きこもらずに家から出られたり、子育てで孤立している若い世代を温かく励ましてもらえる交流の機会を広げていきたい。

収入（年間）

事業収入　上位3事業
地域食堂・子ども食堂　　2,762,320円
地域交流（講座・レンタルルーム、ボックス）723,400円
子育て支援　　350,000円
会費収入
44,000円

寄付収入
274,950円

助成金・補助金
6,375,000円

バザーなど

支出(年間)

家賃
1,200,000円
水光熱費
290,742円
人件費
0円
広報費
19,440円
器具備品費
574,732円
材料費（食材）
1,760,132円
施設整備費
5,400,000円

初期投資と資金調達

出資
400,000円
補助金・助成金
ヨコハマ市民まち普請事業　5,000,000円（2018年度）
公益財団法人かながわ生き活き市民基金　400,000円（2018年度）
高齢者生きがい活動促進事業（厚労省）　975,000円（2018年度）
その他資金調達方法
借入金
1,000,000円

一緒に活動する仲間作り

本当に一緒に活動したいと思って来てくれる人は、あちらから近づいて来てくれる。そういう人は責任感が強く信頼できる。テラスに興味があり訪ねて来る人、質問をしてくれる人には丁寧に主旨等を説明し理解してもらえるよう努力している。

報告３　必要な場所なるみんなで支えよう

～福祉たすけあい基金助成団体の実践から～

人口 3000 人の小さな村のささえあい（愛甲郡清川村）

報告者　NPO 法人 結の樹よってけし
理事長　　岩澤　克美さん

清川村ってどこでしょう？

神奈川県の西部、厚木市の横にあります、神奈川県でたった一つの村「清川村」からまいりました NPO 法人結の樹よってけし代表、岩澤克美と申します。本日はよろしくお願いいたします。

さて皆様、私たちの活動の場所である清川村と聞いて、県内のどのあたりかご存知の方はいらっしゃいますか？清川村は人口 3000 人、面積は町田市と同じくらいです。鹿や猿、猪の方が人口より多く、山の中に人が暮らしています。

よってけしのある団地は、40 年前に開発された新興住宅地。200 世帯全員よそ者で、現在 34%の高齢化率は 5 年後には 40%を超えると予測されています。最近では夫婦世帯、独り暮らしが目立ち始めました。交通では厚木から清川村へのバス便は 1 時間に 1 本、山を造成した地形のため、アップダウンがきつく、バス停までコミュニティバスが運行されています。3 年前にコンビニもなくなり 2018 年 3 月、村が 2 億円でドラッグストア・クリエイトを誘致し、村民の生活の利便性が高まりました。

事業はつながりづくりの手段

よってけしでは現在 8 つの事業を行っています。「できることはないかな？」と一歩足を踏み入れるきっかけづくりや「楽しそうだな」と思える場を作っています。清川村にはスポーツクラブやボランティアグループ等、高齢者の余暇活動などの資源が少なく、人のつながりも希薄だったため、この居場所がその役割を担うことで、人とつながる場になり、誰でも参加できるハードルの低い事業から始めました。

お弁当作りでは料理好きな 81 歳のお母さんが腕を振るい、加工場では 98 歳のおばあちゃんがブルーベリーの選別作業を正座して仕事をしてくださ

っています。不用品を持参しながらお茶を飲んでいくおじさんがいたり、就労支援ではヤマト運輸の受託事業として、メール便を配達する元気な男性が健康づくりのために毎日頑張っていて、全員無給のボランティアで運営しているのが特徴です。

この 8 つの事業は実は手段であって、本当の目的は人とつながることです。よそ者の集まりで、高齢化が進む地域だからこそ、今、人とつながることが大事だと思って活動しています。

安心して暮らせる地域づくりをめざして

私がこの居場所を立ち上げたきっかけは、5 年ぐらい前に大雪が降った時の出来事です。よってけしがあるこの団地では、自分の家の前だけを雪かきする人たちばかりで、隣の家が雪を掻いていなくても「われ関せず」の状況でした。たとえ隣の住人が高齢の一人暮らしと知っていても、それは民生委員の仕事、役場がやる仕事と、誰も手を貸す人はいない状況に私はショックを受けました。この地域のコミュニティの無さに背筋が凍った想いを今でも忘れられません。

私は清川村に嫁いでから、6 年間村の社会福祉協議会に勤務する中で、村ならではの閉鎖的な考え方を知ることができました。「よそ者は排除して、自分を守ることが大事」と考える旧住民と、40 年経っても団地の人は「よそ者」呼ばわりされて村民になりきれない新住民とで村は大きく二分されています。

村のアンケートでは、75%の人が「この村で住み続けたい」と答えていますが、この地域で安心して暮らしていくには、行政任せでなく自分たちで解決したり、問題に声をあげていく住民性が必要だと考えます。そこで社協を辞め、300 万円の自己資金で「集まる・食べられる・楽しめる」をコンセプトに住民交流を中心に「よってけし」の活動を始めました。

この写真は認知症のボランティアさんが、野菜の提供者でもある独り暮らしの農家の男性にお弁当を届ける仕事をしながら、地域住民との触れ合いで笑顔を取り戻せた、そんな印象的な光景です。社会で孤立してしまいがちな人たちがそれぞれの役割を担い、人とつながることで生きがいを持ち、年齢や障がいの有無を越えて地域とつながる新しい循環型社会をめざしています。

～つなぐ　つながる　ささえあう～　地域に必要とされる場所になる

居場所を立ち上げるには、ものすごいエネルギーとそれを率いる強いリーダーが必要です。一方で、立ち上げようという自分の想いだけではうまく回りません。地域の背景、地域住民の想いを理解し、共感してもらえる協力者とともに、地域も人も成長できる団体になりたいと思っています。たとえ最初は理解されなくても、「胸を張って生き生きと活動したい」とスタッフ一同、心を一つにして活動しています。

子どもから大人まで、障がいの有無にかかわらず「地域が大きな家族」になれるように、この場所が地域の柱になり、地域に必要とされる場所に成長できるよう、これからも人とつながる活動を続けていきたいと思っています。ご清聴ありがとうございました。

地域で必要な場所になる

つなぐ　つながる　ささえあう

これから居場所を始めるみなさんメッセージ

「覚悟」

覚悟と勇気が地域をかえていく源
自分が地域を動かす推進力になる
「覚悟」が大事

よってけし　岩澤克美

「結の樹よってけし」基礎情報

居場所名
結の樹よってけし

運営主体
NPO法人結の樹よってけし

主な事業活動
①弁当②農産物加工③住民交流④健康づくり⑤安全見守り
⑥資源有効活用⑦出張美容院⑧就労支援

所在地
愛甲郡清川村煤ヶ谷1103-51

開設日
2014年（平成26年）9月

開所日
2015年（平成27年）10月

会員数と月会費
40名
正会員年会費3000円/賛助会員年会費1000円

スタッフ数(有償)
0人

ボランティア数(無償)平均
１日平均6名

地域連携団体
清川村役場保健福祉課
清川村緑ことぶき会（老人会）
清川村社会福祉協議会
NPO法人里山ネットあつぎ
東京工芸大学森田研究室・市原研究室
東京農業大学ボランティア部

地域の特徴

法人のある清水ヶ丘団地は、40年前に開発された新興住宅地。200世帯全員よそ者、ほとんどが同世代で転入した為高齢化も同時期。子供は巣立ち、夫婦世帯・独居が目立つ。5年後の高齢化率が50%を超え、住み続けるには厳しい現実が目の前にあり、転居する人も多い。アップダウンがきつい地形の為、有志が始めたコミュニティーバスが、自宅からバス停まで運行している。バス便は本厚木駅まで40分かかるが、1時間に1本運行され、貴重な交通資源。65歳以上は「かなちゃん手形」を購入すると1回100円で乗車でき、利用者も多い。生活面では、コンビニが撤退後、村が2億円かけ「ドラッグストア・クリエイト」を誘致。道の駅とあわせ、村民の買物不便は解消し、生活の利便性が高まった。住民の特性は、地元住民は林業と農業で生活を営み、新住民は公務員・団体職員・大手企業勤務が多く、旧住民と新住民は、互いに相まみれない関係で軋轢は深い。40年経過した今でも「団地の人」と呼ばれ、よそ者扱いのままである。

開設の動機・目的

40年経過した団地の高齢化率は村内でトップ。隣人は知らない、関心もなく関係性も深くない。社協勤務時代、大雪の時に雪かきもされない一人暮らしの家を見た時、「お互い様」が根底にない地域性に危惧を抱く。社協を退職後、「長年住み慣れた地域で安心して暮らせる地域社会の構築」を目指し、団地内の空家を改装して居場所を立ち上げた。空家の改装中、立ち止まる住民の声を聞き、要望を集め、「集まる・食べられる・楽しめる」をコンセプトに、住民交流を中心に活動を始めた。ここが地域の人と繋がる場所になり、互いを知り、困った時「困った」が言える環境に熟成されるよう活動していく。

事業収入　上位3事業　　￥5,315,383
地域就労支援　￥2,570,933
食事提供及び弁当配達事業　　￥1,616,980
農産物加工販売事業　¥648,590

会費収入
受取会費　￥148,000

寄付収入
受取寄付金　¥755,440

助成金・補助金
助成金　¥600,000
補助金　￥300,000

その他
前年度繰越金　￥337,545

支出(年間)　￥6,568,295

事業費　￥4,969,116　事業費の中で主なもの
人件費　￥62,232
材料費（事業食材）　￥949,309
車両費　￥601,802
委託料（ヤマト運輸）　￥1,446,068
減価償却費　￥468,494
消耗品費　￥230,599
物品資材購入費　￥275,076
保険料　￥245,790
外注費　￥421,431

管理費　￥1,278,277　管理費の中で主なもの
人件費　￥60,000
福利厚生費　￥198,670
旅費交通費　￥10,870
通信運搬費　￥106,933
消耗品費　￥235,385
水道光熱費　￥190,013
地代家賃　￥120,000
外注費　￥264,600
修繕費　￥58,139
接待交際費　￥48,608
研修費　￥20,120
今年度繰越金　￥973,077

初期投資と資金調達
出資　自己資金　¥3,000,000

補助金・助成金
2016年～2018年　中央ろうきん助成金　￥300,000×3年（毎年申請最大4年間）
~~2016年～2018年　ライフフリー助成金　￥350,000×3年（3年間確定）~~
2016年～2020年　清川村運営費補助金　￥300,000×5年（5年間確定）
2018年　福祉たすけあい基金　￥400,000（毎年申請最大3年間）
2018年　林野庁交付金（作業面積に応じた額）￥580,000（毎年申請最大3年間）

一緒に活動する仲間作り
初年度のコアメンバーは条件付で探した。①無償ボランティア②生活費を稼ぐ必要がない人③社会貢献をしたい人　各事業の適任者に声をかけアプローチした。例えば、健康づくり⇒看護師、弁当づくり⇒料理好きで人の喜ぶ姿を生きがいとする主婦、配達⇒運転好きで人好きな男性等、「自分のできることで地域の役に立つなら」と集まった。活動していく中で気が付いた点は、同年代が集まった事で多様な意見が出にくく、お願いされて始めた活動なので自主性がなく、活動の広がりを感じられなかった。役員改選後は、年齢や職種、経験や違った考え方の人、法人の理念と共通意識がある人をコアメンバーに選んだ。仲間づくりには、誰でも良いわけではなく、互いに高め合える、気概のある人をまき込むことが大事。

報告４　必要な場所ならみんなで支えよう

～福祉たすけあい基金助成団体の実践から～

放課後クラブ！プロジェクト（鎌倉市）

報告者　　コミュニティカフェ６丁目クラブ
理　事　　廣瀬　和子さん

高齢化の進む住宅地でのたすけあい活動

6 丁目クラブの廣瀬和子です。6 丁目クラブのママと呼ばれています。たくさんのママたちと活動をしています。よろしくお願いいたします。鎌倉市の北側、横浜寄りの場所で「放課後クラブ」の活動で支援を頂きました。

私たちの住む今泉台という団地には 2000 世帯、5000 人の人が住んでいます。50 年前に新興住宅地だったので、今は超高齢化が進み 6 丁目ではそれがピークに来ています。50 年前に新しく家族が住んだ場所は「子育てを一生懸命しよう」、「ここで新しい人間関係を築いていこう」と希望にあふれていました。一斉に入居した人たちが一斉に高齢化し、今ではどの家も静かで、ご夫婦二人暮らし、独り暮らしの方たちの山になっています。「住みなれた場所で一緒に住んでいきたい」とみなさんが希望しているので、それを何とか私たちが手助けしようと「コミュニティカフェ 6 丁目クラブ」が生まれました。

まちの中でやりたいことを実現

このまちのいいところは、住む人たちが好きなことができる、これがやりたいと思えば何でもやれるところです。最初は「消防楽会」。楽しい防災訓練を行いました。のちに男性陣による防災組織作りにつながりました。そのあと「助っ人会」というちょっと困ったことがあったらたすけあいをしようという会をつくって、活動していました。何か近所でもできないかと考えていた時、赤ちゃんを産んだばかりのママが歩いているのを見て、お茶を出したいと思いたちました。「赤ちゃんステーション」ということで始めたら、赤ちゃん連れのママたちが集まってきてお母さん同士が話をするようになって、10 年間や

ってきました。また、まちのなかで音楽会をやりたいと、広い公園に吹奏楽団を呼んで野外コンサートを 10 年開催しました。そのような運動を長く続けて、同じ思いを持った人たちがどんどん入ってきて、仲間を増やしてやってきました。

「場」をひらくと想いを持った人が集まってくる

6 丁目クラブの活動のきっかけは住宅地の中につくった「より道」の開設にさかのぼります。この地域に特養ができた時に福島さんという総施設長が引っ越してきて、住宅地の中に「より道」というステーションをつくりたいということで、そのお手伝いをしていました。1 年半くらいで福島さんが亡くなられて、「より道」はクローズになりました。「同じようなものができたらいいね」と考えていた時に、空き家を持っている人から「ここで何かやらない？」と声をかけてもらい、「コミュニティカフェ・6 丁目クラブ」をひらくことになりました。

資金はＷＡＭ（社会福祉振興助成事業）からお金を引っ張ってきてくれました。赤ちゃんステーションに通って来ていたママが「18 年経ったのでお手伝いします」と言ってくれて、スタッフとなっていますが、私が育てた赤ちゃんステーションの宝物です。地域にはいろんなことをやりたい人がいて、居場所をつくったら人が集まってきました。場所があるということは大事なんだなと思います。どこか場所があったら開いてみると、来たい人がきっといるので、いろんなことができると思います。

学校とは違う、自由で楽しい子どもたちの居場所づくりへ

開設から 1 年経ったときに、一番やりたいと思っていた子どもたちの放課後を引き受ける場として「放課後クラブ」を始めました。金曜日のカフェの終了後 4 時から 6 時で子

どもたちに来てもいいよと場を開き、毎週 20 人くらい来ています。ここでそろばんを教えてもらいたいと思っていたら、娘さんを頼って今泉台に越してきたそろばんの先生が、無償で教えてくれています。

とにかくいろんな子どもたちがたくさんやってきます。いろんなトラブルが毎回起こって、私たちの目が三角になることもありますが、それでも子どもはそんなことに見向きもせずに毎週通ってきます。「場」があることは子どもにとっても大人にとっても、いいことだなと思います。みなさんも是非やってみてください。

z これから居場所をはじめるみなさんへのメッセージ

「地域のﾈｯﾄﾜｰｸを世代をこえてつなぐ」

人間関係が地域をつくる、
ネットワークの中で自分も育つへ
大切なネットワークを若い世代につなぐこと

コミュニティカフェ 6 丁目クラブ　廣瀬和子

「コミュニティカフェ6丁目クラブ」基礎情報

居場所名
コミュニティカフェ6丁目クラブ・放課後クラブ

運営主体

主な事業活動
カフェ・ランチ・配食事業

所在地
鎌倉市今泉台６－１－９

開設日
平成２８年９月

開所日
平成28年11月1日

サポーターと呼ぶ会員数　サポーター会費
70名
1000円で珈琲3杯チケット

スタッフ数(有償)
18人

ボランティア数(無償)平均
３～５名

地域連携団体
今泉台町内会
すけっと会
地域包括センターふれあいの泉
特別養護老人ホームふれあいの泉
鎌倉市社会福祉協議会
オレンジライン
NPO法人タウンサポート鎌倉今泉台

地域の特徴

50年前に開発された新興住宅地、2000世帯5000人の村、鎌倉市の中で横浜に近い山の中、コンビニなし、信号なし。新しい街は、働き盛りの男たちを社会に送り、子育て主婦の地域社会ネットワークで街を作ってきました。新しく小学校が出来、中学校が出来、消防署ができ、街はたくさんの子供であふれていました。今新興住宅地から子供達は成人して出て行き、高齢化率だけが上がっています。子供達の故郷になった町で、できる限り長く自分の家で過ごすことを希望する親の街です。若い住人も自然豊かな環境は何よりの宝という人たちが多く入ってきています。

開設の動機・目的

50年経った街の高齢化は進み、如何に年をとっても楽しく豊かに自分の家で、暮らすことができるかを70歳を迎えた私たちが目指して、自助・共助の街づくりのお手伝いをしながら、今高齢化率ピークの6丁目に居場所「6丁目クラブ」を作りました。みんなの居場所は、私たちの一番の居場所となっています。

収入（年間）H30予算	収入（4月～12月）H30実績
事業収入　上位3事業	事業収入　上位3事業
カフェ・配食事業￥4,421,000	カフェ・配食事業￥3,707,137
会費収入	会費収入
サポーター会費　￥960,000	サポーター会費￥960,000予定
寄付収入	寄付収入
寄付　￥ 30,000	寄付　￥30,000予定
助成金・補助金	助成金・補助金
助成金　￥ 1,116,000	助成金　￥1,116,000
その他	その他
前年度繰越金　￥859,000	前年度繰越金　￥859,000

支出(年間)	支出（4月～12月）H30実績
家賃　￥ 960,000	家賃　￥723,888
水光熱費　￥270,000	水光熱費　￥159,888
人件費　￥2,091,000	人件費　￥1,792,400
広報費　￥22,000	広報費　￥ 0
器具備品費　￥419,000	器具備品費　￥471,621
物品購入費(食材)　￥2,310,000	物品購入費(食材)　￥1,884,375
消耗品費　￥ 310,000	消耗品費　￥190,307
旅費・交通費　￥ 106,000	旅費・交通費　￥ 55,000
その他　￥ 521,000	その他　￥138,057
今年度繰越金　￥ 377,000	今年度繰越金　￥

初期投資と資金調達

出資
¥180,000
補助金・助成金
平成28年度WAM助成　¥2,980,000
平成29年度WAM助成　¥3980000
平成30年度　日揮社会福祉財団¥219,000
チャレンジ¥200,000
生き活き福祉基金￥３９７０００
中西茂雄高齢者福祉基金￥３００,０００

一緒に活動する仲間作り

子育てをする中で培った人間ネットワークは、楽しいことをする仲間です。子供会、公園を使った野外コンサートの会、消防学会、サロンコンサート、赤ちゃんステーション、等。そして選挙も手作りネットワーク。近くに特別養護施設が出来た時、施設長が開いた空き家の「寄り道」初めての居場所つくりを私たち（地域の宝）と呼んで手伝わせてくれました。その時の仲間で6丁目クラブのクラブ活動は始まりました。

～「地域のインフラとなる居場所」パネルディスカッションより～

これから居場所づくりをはじめるみなさんへのメッセージ

＜パネリスト＞

- 塩原　佳織さん　（NPO 法人ワーコレたんぽぽひろば）
- 永瀧　千恵子さん　（NPO 法人宮ノマエストロ）
- 岩澤　克美さん　（NPO 法人結の樹よってけし）
- 廣瀬　和子さん　(コミュニティカフェ 6 丁目クラブ)

＜コーディネーター＞

影山　智明さん　(クルミドコーヒー)

お互いの居場所訪問を通して気づいたこと、学んだことは？

塩原：御一人御一人との関係をすごく大事になさっていると感じました。
私も今後そのようにやっていきたいなと思ったのと、自分自身も一人一人との関係を大事にしてきたことに改めて気づきました。

永瀧：横浜市は他の市に比べて行政のサポートがしっかりしていて、そういうことにも助けられたと改めて感じました。

岩澤：「お金の大事さよりも人のつながりのほうが大事だよね」とずっと言い続けてきたけれども、実際長く続けていくためには、お金はやっぱり必要なんだと皆さんの活動を伺って感じました。

廣瀬：いろんなエリアでそれぞれ頑張っていることがすごくよくわかりました。
今回このような居場所がいくつもあるというのがわかって心強かったです。

居場所を開設して
苦労したこと、たいへんだったことは？

塩原：最初は人が全然来なくて、とにかく人が来るのを中で待っていました。保育士以外の仕事をしたことがないので、広報がすごく苦手。チラシも上手に作れず、撒き方も広げ方もわからない中で、フェイスブックで少しずつ広がっていきました。「それでもがんばろうね」「何があっても 1 年は継続しよう」と 2，3 か月続けていたら、一人の人からのご縁の繋がりで広がりました。あと、びっくりしたのは小学生が来て、友だちに広げてくれました。

永瀧：「空き屋を壊して居場所をやっていいよ」とオーナーの方がすばらしい建物を建ててくれました。家賃の 10 万円は何とか、サービスＢ＊という事業で支払えていますが、「甘えてはいられない」と開いてみて実感しています。今は全く、無給で働いています。「これから頑張らなくちゃ」と今が大変な思いをしています。

岩澤：清川村は、よそ者は受け入れられにくい地域性があります。新しい考え方や「よってけし」の活動を認めてもらえない。本当は行政ができないグレーのところを私たちが手助けしているという自負がありますが、認めてもらえないところが、とてもつらいところです。

廣瀬：私は困ったことじゃなくて、自慢を。12 万円の家賃を大家さんが 8 万円にしてくれました。家賃をどう捻出するかと考えた時に、「毎月千円サポーターになってください。」というお願いをまちの中でしました。そうしたら「いいよ、千円」と言って 70 人くらいサポーターが集まりました。
300 円のコーヒーですから、「三杯飲めば、一か月 100 円の寄付ね」と思って下さる方がいて、ほとんど家賃はそれでカバーしています。「なんていいまちなんだろう」と私の自慢です。
3 年目に入りますが、そういう「サポーター方式」がうまくいっていると思います。私の顔を見たらみんな「あっ、お金払うからね。」と言って白髪の頭が通るたびにみんながお金をくれます。

＊　横浜市介護予防・生活支援サービス補助事業

ボランティアを始めとした地域住民の方々が、要支援者等の方に定期的に高齢者向けの介護予防のためのプログラムを提供します。その活動に係る費用に対して、補助金が交付されます。

居場所事業　「お金」のもつ意味合い

～「お金」もらえればいいけど、
なくてもいい。「お金」よりも誰かの役に立っていることが大事という考え方。
一方で、ちょっとの「お金」を介入させることで、
若い人たちの地域活動参加の後押しにも～

岩澤：「お金ってもらえれば嬉しい。でも、なくてもいいよね。」と**「よってけし」**のスタッフからよく話がでます。ないほうがたぶん自分がやりたいことができるでしょうし、お金という対価ではなく、自分が役に立っているという価値観、達成感が得られるということだと思います。
ただ、これは年金をもらっている世代だからこそ言えること。これが子育て世代の「ちょっとでもいいからお金欲しいよね」、「お金が出なくても近いところで働きたいよね」という方には通じない。そこが一番難しいところ。お金を払ってあげたいけど「払わなくてもいい」という人と「払ってくれるならほしいわ」という人のその差がものすごく大きいと常に感じています。

廣瀬：**「6 丁目クラブ」**は最初 WAM（独立行政法人 福祉医療機構）から助成金をもらった時に、「人が活動するための費用は惜しみません。人が動くということに対価をつけてください。」と言われました。
スタッフに支払う活動費は、カフェの営業時間（11 時～15 時）に合わせて、4 時間×500 円を基本としています。どんなに働いてもそれだけのペイ。9 時からキッチンをやっていても 11 時から 15 時までの 4 時間分の 2 千円。ホールに 2 人、キッチンに 2 人、1 日 4 人分の活動費というふうに考えてお金を出してきました。安定的に回っていますが、ホールで働いている若い人にもう少し出したいな、というのがおばさんたちの気持ちです。

塩原：今のお母さんって、朝の 7 時から夜の 7 時までフル回転しないと子どもを保育園に入れられないとか。ただちょっと少し暮らしに余裕がほしいだけなのに、そんなに働かないと子どもも預けられないという状況。**「たんぽぽはうす」**でママたちと接していると、ちょっとしたお小遣いが欲しいというお母さんが沢山いる。今後はお母さんたちの得意を活かして何かお小遣い程度のものが得られるしくみがあれば、いい経済がまわって、さらにお母さんたちの働く環境も、もう少し緩めてあげられるのかなと思っています。

永瀧：下の子が幼稚園に入った時に私もお金を稼ぎたいと思いました。有償ボランティアとして団地の中の一人暮らしのお年寄りのところに行って、買い物や、部屋のお掃除をしました。1 か月に 1 万円、1 万 5 千円、自分で稼いだ自由になるお金がすごく嬉しかった経験があります。だから**「宮ノ前テラス」**でも若い人たちに働いてもらいたい。今は無償でやっていますが、「たとえ 500 円でも払えたらな」という気持ちです。だから年間で剰余が出せたら「少しでも若い人たちに謝金を払いたいね」と思って頑張っています。

居場所にむけたチーム（なかま）づくり

同じ思いや志をもつ仲間どうし話し合いを通してお互いを受け止めあい、わかりあう、
そういうプロセスを大切にすることで、より良い活動へとつながっていく。
ともに活動する中で自主性のあるリーダーを育み、
若い世代へとリーダーのバトンをつなぐ。

塩原：**「たんぽぽはうす」**ではメンバーがワーカーズ・コレクティブという働き方をしているので、そもそもみんなが１つの志。「何かしたいな」と思うとみんなの志が一緒。お金よりも志を大事にする人たちがそもそも集まっていたからやり易かったと思います。
メンバー26 人が一人ひとり意見を出し合って、とことん話し合って、その中でみんなの一致できる場所を見つけて決めていく。全員がいいか、全員やめるか、話し合いをしていく中でどちらか。あきらめずに話し合って、すべて合意形成してやっています。

岩澤：**「よってけし」**は最初に個人で立ち上げて、１年間のうちに NPO 法人になりました。300 万円を自己投資し、すべての事業に携わり、流れを作って、責任をとる覚悟でやってきました。私のやりたいことの思いが「よってけし」の形になったこともあり、どうしても会議では考えがトップダウンという状態になっていく。
でも３年間継続して仲間も成熟していき、正会員やお手伝いの人を含めて 40～50 名に広がっています。今後は自主性のあるリーダーが生まれて、任せていく方向性に変わりたい。そこが４年目の転機なのかなと思っています。

廣瀬：**「６丁目」クラブ」**では 20 人のスタッフが順番にキッチンに立ちますし、ホールも順番に回してやりくりしています。半分がイノシシのように走る人たちで、なんでも走って後を振り向かないというやり方でやってきましたが、毎月一回役員会をやって、「今月はこういう感じでやっていきましょう」と話し合っています。辞めた人がまだ一人もいない、皆よく頑張っていると思います。
次の世代に運営体制を引き継ぐことも考えて、若い人たちにイニシアチブを持ってもらってバトンを少しずつ渡そうとしています。引き継ぐ若い人のネットワークがあるので助かっています。そうやって自然にバトンをつないで、私が亡くなったあともこれが残るといいなと思っています。

永瀧：**「宮ノマエストロ」**は理事５名、役員 14 名。大事なことは理事で決めますが、そこに若い人が２名入っています。事前にラインでやり取りしているので、今ある問題などを皆で把握していて、短時間で話し合いができています。困った時には皆さん協力し合うなど、思いを持った人が集まっていて、人には恵まれています。

情報発信で仲間づくり

居場所づくりにとって
「作る側、担い手側に回る人をどう増やしていけるか」は、大事な要素。
作る側、担い手になるという経験は、
様々な局面で、「自分自身もまちづくりの主役になれる」という気づきに繋がっていく。
居場所活動に関わる人を増やすことが結果として豊かなまちづくりになっていく。

岩澤：人口 3000 人の清川村、村の限られた人で回そうとすると、なかなか資源が少ない。だから外から若い人たちを呼びこみ、その人たちと繋がって力を借りて、プラスの力に変えていく。資源がないことを悲観せず、ないからこそ知恵をしぼれるのだと思います。発信を届ける方法は、様々な場所で清川村ということを言い続けるわけです。ここで百人近くいらっしゃる方が、「**清川村**だね、**よってけし**だね」と関心を持ってくれるところから広がっていく、地道に発信していくことと、人の力を借りること、が一番大事なことかなと思っています。

広瀬：**「６丁目クラブ」**は地域の２千世帯の中で広げていくというのが私たちの夢です。遠くからではなく近所の人に来てもらいたい。ですから広域に発信することは控えています。
ごく身近なところに「場」があることが大事なことだと思います。「６丁目クラブ行ったことがなかったけれど、この間行ったわ」という方が地域の中で少しずつ増えていくような、地域の中で地道に広がっていく関係でいたいと思っています。

塩原：広がりということで言うと、**「たんぽぽはうす」**で特徴的だったこと、面白かったのが「すきま」が大事ということです。自分たちだけではできない、ちょっとした空白の部分ができると、そこに人が入ってくる。
小学生のフリースペースでの企画を検討していた際に、そこに子どもと関わりがない、お子さんがいらっしゃらない地域の人に来てもらって、ご自身の仕事について教えて頂く機会を作りました。すると、「子どもたちと過ごすのってこんなに楽しいんだ、こんな居場所があるんだ」といって、私たちが手の届かないところに情報を広げてくれました。面白いなと思いました。

永瀧：**「宮ノ前テラス」**の場合子ども食堂をやっていると、2 階が学童なので帰りがけによってお母さんと子どもが 30 人くらい食べに来てくれます。グループラインでメニューを写真で送って、それを見てきてくれる方もいます。フェイスブックもやっていますが、SNS は若い方にはやはりすごい発信力になっています。
テラスの向こう側で覗いてる方にはパンフレットを持って挨拶に行く。そういう地道な努力も大事です。遠くからでも見てくださっている方はちょっとでもテラスに関心があると思うので。

フォーラムその後

～4 団体の活動の進展～　（2019 年 8 月 30 日座談会より）

フォーラムから 7 か月が経過し、各団体の活動に様々な進展がありました。
再び 4 団体のみなさんが一堂に会し、活動共有を行いました。

座談会開催日：2019 年 8 月 30 日（金）
場　所：「古民家カフェよってけさん」　（清川村）
参加者：NPO 法人結の樹よってけし　理事長　岩澤克美さん
コミュニティカフェ 6 丁目　理　事　廣瀬　和子さん
NPO 法人ワーコレたんぽぽひろば　理事長　塩原香織さん
NPO 法人宮ノマエストロ　副代表　永瀧千恵子さん
公益財団法人かながわ生き活き市民基金　理事長　吉村恭二　城田喜子、大石高久、土屋誠司、　荻原妙子

第2の居場所「古民家カフェよってけさん」9月20日オープン

NPO 法人結の樹よってけし
理事長　　岩澤　克美さん

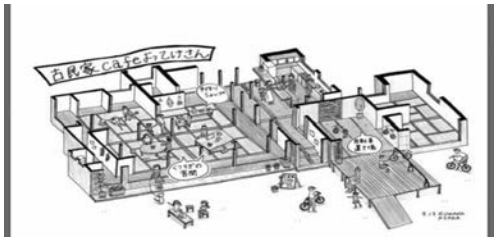
学生との連携で古民家リノベーションにチャレンジ

よってけしの開設から４年、2019 年 6 月より、築 180 年の古民家を借りて新たな居場所開設に向けた一大プロジェクトが始まりました。東京工芸大学の 2 つの建築ゼミとの連携で、のべ 200 人くらいの学生がカウンターを作ったり、漆喰を塗ったり、9 月 20 日のオープンに向けてリノベーションを進めています。その他にも産業能率大の学生がホームページやソフト面を担当し、動画を作ってくれたり、絵を描いてくれたり、創価大学法学部のゼミ生が NPO の活動に興味を持ってヒアリングに訪れたり。学生との連携では様々な気づきや学びの連続ですが、この新たな出会いをもとにオープンにできたらと思っています。

親しまれる居場所をめざして

新たな居場所は「古民家カフェよってけさん」　カフェの命名に当たり、地域に融合する名前を付けたいと思いました。もともと「よってけし」を作ったときに、地元の人たちからは「よってけさん、よってけさん」と呼ばれていました。「よってけ」は清川村の方言で、「上がっていきな」という意味の言葉。その「よってけ」に「さん」をつけて、「よってけさん」と親しみを込めて呼ばれていたので、それをカフェの名前にしました。

横浜から隣の空き家に引っ越してきたご夫婦に「よってけさん」の管理をしてもらう予定です。ご主人は農福連携の B 型作業所に従事する方なので、将来的には別の空き家を使って行政との連携を作りながら、B 型作業所をもできたら良いなと思います。奥さんがヨガの先生でインド料理研究家なので、一緒にカフェをやりながら料理をしたりヨガをしたり人が交われる場所、イベントを開催する場にしていきたいと思います。すでに二胡のコンサートと福祉たすけあい基金助成



団体である「本もく座」による紙芝居の企画が決まっています。その他にも今まで築いたネットワークでワークショップなどをやっていく計画です。

新たな参加で居場所が活性化

新拠点の準備に関わるようになって、「よってけし」にも変化が起こりました。近くに住むメンバーが主になって管理を担うようになったところ、ご近所さんが来てくれるようになりました。また、近隣にチラシをまいたところ、「この場所を使ってこんなことをやりたい」と言ってくる人が出てきました。このような流れは、「基盤を作ってそれを次の人に任せていく」という当初のプランが想定内に進んでいるのだと思います。一方で収入が全くなくなって全部出るばかり、お弁当も加工品も作っている暇がないというのが今の課題です。

高齢化の進む村のたすけあいのモデルづくり

この古民家のある地区は 8 軒全てが高齢者住まいで、調査をするとあとを継ぐ人がいないのも明確になっています。村の人口も減りつつあって、後期高齢者が亡くなると一気に人がいなくなります。高齢化率 34%の清川村。元気なお年寄りがすごく多いとは言っても、たくさん持っている畑の管理などは高齢者だけではどうにもならないでしょう。最終的に困ったときに助けてくれるのは民生委員と「よってけし」しかいないというのが、この村の現状です。このような高齢化の進む地区に、私たちがたまたま入ったからこそ、やるべき課題が見えてきました。村の人たちに寄り添い、地域の人からの安心感が得られていくと、よそ者が入っていっても認められるでしょう。高齢化の進む村のモデルとして自分たちの事業を打ち出せれば、行政との連携も自ずと進んでいくと思っています。

一人暮らしの高齢者のための「寄り道ランチ」がスタート

（　コミュニティカフェ６丁目クラブ　　鎌倉市　）

コミュニティカフェ６丁目クラブ
理　事　　廣瀬　和子さん

高齢になっても楽しく豊かに過ごすひとときを

2019 年度から新たに「介護予防日常生活支援総合事業」として一人暮らしの高齢者を対象とした食事会「寄り道ランチ」を始めました。これまでも毎週一人暮らしのお年寄りを集めてご飯を食べる会をずっとやっていましたが、「新しく介護予防日常生活支援総合事業補助金が出ます」と社協の人がつなぎ役になってくれて、鎌倉市からお声がかかり、支援をいただくことになりました。これまで６丁目クラブでやっていたことが事業につながりました。

「寄り道ランチ」は毎週金曜日（月 4 回）12 時から 14 時までの 2 時間、6 丁目クラブの 2 階を会場として開催しています。スタッフ 2 人体制で、毎回 10 人くらいの方が参加しています。3 月から始めて鎌倉市の H31 年度計画にも入りました。市からは家賃分として 10,000 円、光熱費 5,000 円の月 15,000 円の補助金を受けられることになったので、6 丁目クラブの運営にとってとてもありがたいです。

今泉台の方なら誰でも参加できるので、健康な方も、付き添いで参加するのも可。参加者はお食事をして、順番にハンドマッサージを受けて 2 時間過ごします。補助金をいただいているのでコーヒーを無料で提供しています。この事業を始めて、もともと来てくれていた人に加えて、今まで 6 丁目クラブに来たことがない人も来てくれるようになりました。地域包括や社協の人ものぞきに来てくれるので、「地域包括の人と話をしたい」「支援を受けたい」と相談に来る人もいます。

子どもたちと過ごす今この時を大切に

「放課後クラブ」には不登校の子どもも通ってきています。ここに来たいと思った子が来ているので、それを受け入れ、ちょっと気になる子が来たとしても、相談機関につなぐようなことはしていません。ここでの2時間は一人ひとりの子に向き合い、濃い付き合い方をしています。ここは子どもたちの成長過程の中で通り過ぎる場所だから、今ここで解決しなくても私たちは一緒に過ごす時間と空間を一生懸命向き合えばよいと思っています。「放課後クラブ」を卒業しても、地域の中にはこれからもお互いに共存する隣人という関係は途切れませんから。

若い世代のなかまにバトンタッチ

カフェは若い人たちが積極的にかかわって回していますが、まだ、立ち上げメンバーが頑張りすぎているので体制には変わりはありません。「私が要支援になったら面倒見てね」といつも若いメンバーに話しているので、75 歳になったら若い人たちにバトンタッチしようと考えています。

新たな居場所づくりとして「よってけし」のように6丁目クラブを分家して広げていくのも良いと思いますが、若い人はみんな働いていて動ける人が少ないのが現状です。今泉台は1割が空き家。近くに居場所を作ろうとしている動きもあって、6丁目クラブの話を聞きに来る人たちもいますが、なかなか行動を起こすところまではいっていないようです。私たちは無鉄砲だったから始められたのかもしれません。

鎌倉市にはNPOが300も400もあって市民がやりたいことをやっている地域。自分たちで考えて新しいことを始めていく人が広がっていくとよいと思います。

地域の小学生、不登校児の親子がありのままで過ごせる居場所に

たんぽぽはうす（茅ケ崎市）

NPO 法人ワーコレたんぽぽひろば
理事長　　塩原香織さん

子どもたちのホッとスペースとして地域に定着

「たんぽぽはうす」での活動が３年目に入って、ニーズが顕著になってきました。「不登校のお子さん、お母さんの居場所」、「小学生の居場所」という認知が広がり、人が集まってきています。居場所事業は私たちのやりたいと思っていたことだったので、事業性は望めませんが、この取り組みを支える事業として保育事業で頑張っていきたいと思っています。これから保育無償化が始まりますが、行政の枠から外れた人、要件に満たない人や、ご自身で手続きが難しいという人たちの保育ニーズがあるのではないかと考えています。ただ、事業を継続していく上では現実には難しい問題もあり、3 年後どのようにしていくか、今から検討しなければと思っています。

子どもたちにとっての「第 3 の居場所」

人手不足やひとり親家庭が増えている社会の中で、子どもたちの周辺に様々な課題が出てきていると感じています。不登校の小学生の居場所がなく、行き場を失っています。だからこそ「たんぽぽはうす」のような、子どもたちにとっての「第 3 の居場所」を作る必要があると思ってやっています。行政の枠組みからはみ出したようなところに、私たちのできることがあるのではないかと思っています。

「小学生のためのフリースペース」には毎回 20 人くらいの子どもが友達同士誘い合ってくるようになりました。ご飯を一緒に作って食べ、ゲームをやって 3

時くらいまで過ごしています。プログラムに縛られず子どもたちが過ごせる場所が意外と少ないようで、すごくおおぜい集まってきてくれるようになりました。これまで誰でも来られるフリースペースとしてやってきましたが、食材準備や安全性などの面から、メンバーからは「申込制にしないとだめなのかな」という声も上がってきて、そうすると本当に来てほしい子どもたちが来られなくなるのではないかという難しい問題も新たに出てきました。

安心して過ごせる不登校の小学生の居場所

「不登校を考える居場所・たんぽぽカフェ」に進展がありました。当事者だった子が来て「こういうことが辛かった、こういうことが言いたかった」と話をしてくれるようになりました。これまで「たんぽぽはうす」とは全く関係性のなかった子ですが、私たちの活動を知って当事者としての声を上げてくれました。「たんぽぽカフェ」はスタッフに当事者のお母さんもいて、これまでも専門家に来てもらって頑張ろう、不登校を改善しようというスタンスではなく、当事者同士が共有する場を作ること大切だという思いでやってきていたので、このような出会いにつながったのだと思います。

みんなが忙しすぎて子ども中心ではなくなっている社会。子どもたちのことをあれこれ推測するだけでなく、子どもたちの思っていることに耳を傾けたいと思います。実際に聞いてみると子どもの答えは意外とシンプルで、大人がいろいろ後付していることもあるのではないかと思います。茅ケ崎には不登校の小学生が集まれる場がないので、今後は不登校児の居場所、フリースクールのようなものができたらと思っています。

多様な企画で地域・行政への発信力を強める

（　宮ノ前テラス　横浜市泉区　）

NPO 法人宮ノマエストロ
副代表　　永瀧千恵子さん

充実したプログラムで地域にアピール

横浜市介護予防・生活支援サービス補助事業＊として行う「エンジョイエイジング」の利用者拡大に取り組んでいます。オープン時は日曜日に週１回だけでスタートしましたが参加が広がらず、曜日も内容も豊富にして、現在は週３回開催しています。

日曜日は回想法をメインにヨガや歌などのプログラム。3 月からは火曜日に初心者向け健康マージャンを始めました。コアメンバーの女性とボランティアの男性が優しく丁寧に教えてくれ、わかりやすいと好評です。さらに６月から始めた木曜日の趣味の活動（折り紙、裁縫、編み物等）は、要支援の方を重点に場所をテラスの近くの古民家「和み庵」で行っています。ケアマネジャーに「いろんな選択肢がある」とアピールしていますが、なかなか参加が増えません。せっかく集まった参加者も、要支援から介護度が良くなった人や悪くなった人がいてまた減ってしまうこともありました。まだ始まったばかりの事業なので、使い勝手など現場から様々な声を上げていくことが必要だと思っています。

多彩な顔ぶれでランチを担当

１年間やってみて一番の事業収益の柱がランチ・カフェと宴会でした。ランチと子ども食堂は私達の代表が献立作成、調理リーダーとして1年間みんなを引っ張ってやってきましたが、10 月からは毎週水曜日に蕎麦ランチ（天ぷら付き）を始めました。そば打ちをやってくれる男性が３人も現れ、打ちたての蕎麦は大好評です。さらに料理好きの女性が毎週木曜日にパスタをメインにランチを担当して

くれることになり、宮ノ前テラスにいろんなカラーが出てくるのではと楽しみです。
　夏休み子どもイベントはオープン前から続けていた成果で、近くの小学校の子どもたちがたくさん来てくれました。

地道に丁寧な情報発信を

　いろんな企画を知ってもらうには広報はきちんとしなくてはいけないと思い、この１年間チラシをたくさん作って町内会に配布したり、掲示板に貼ったりして地域の方に見てもらうようにしてきました。また、「子育てサイトを見てきました」という人もいてＳＮＳなども重要なツールだと思うので力を入れていきたいです。
　各イベントへの参加を広げたいと区役所の子供支援課に定期的に相談に行ったり、子育て支援活動拠点にチラシを置いていただいたりしてぽつぽつ人が来るようになりました。定期的に区役所にテラスの最新情報をアピールし、待つのではなく行動する事も大事なことだと感じています。

　９月の１周年イベントは、これまでお世話になった方々を中心に案内状を出し、当日はテラス名物ガパオやケーキ、飲み物をバイキング形式にし、皆さんに自由に過ごして頂きました。

子育て世代のボランティア参加を

　一番の問題は、子ども食堂や見守り活動などの慢性的なボランティア不足です。謝金を払わないと若い人はなかなか参加してもらえないので、今後１時間 100 円くらいの謝金を考えているところです。でも、その金額でもいいという人は年配の人ばかり。夜の宴会・パーティーは金額が高いため、3 時間 2000 円で手伝いを募ったところ、早速やりますという人が出てきました。確実に収益のあるところからボランティアを募り謝金を払う事で、子育て世代にも関心を持ってもらいたいと考えています。

＊横浜市介護予防・生活支援サービス補助事業：
　　住民主体のボランティア等が地域の拠点などで票支援者等を中心とした利用者に、定期的に高齢者向けの介護予防に資するプログラムを提供する活動
**回想法：懐かしい物や映像を見て思い出を聞いたり語り合うことで、脳を活性化し情緒を安定させ、長く続けることで認知症予防につながるといわれている心理療法

～おわりに～

みなさんのような居場所を増やしていくためのアドバイスは？

岩澤：やってみたい人は多分いる。でもノウハウもないし、不安もあるだろうから、やりたい芽をどう育てて、やろう！と覚悟を持てるまでにするか？

塩原：まずは話を聞いてくれる人がいること、場があること。行政にも相談コーナーを作って市民からの相談を受けているところもあるけれど、私たちが本当に相談したいところは行政ではないですね。

永瀧：行政の人は相談にのってくれたとしても実践者ではないので、実際にやっているところに飛び込んで行って、ボランティアとして一緒にやってみる体験を積むほうが大事だと思います。それを 1 年くらいやってみると、やりたいことも見えてくるし人脈も築けると思います。

塩原：そういう体験を通して「こんなことができる」と思えるようになる。ところが行政は段ぬかしで、「何がしたい？」「どうやって？」「お金は？」と気持ちを育てることよりもノウハウでやっている感じがします。

岩澤：良いも悪いも知ることが大事だし、自分たちの身の丈に合った「できそうだ！」と思えることに触れることが大事です。そして「やってみようよ、一緒にやってみよう！」と声を出すこと！

廣瀬：「これからやってみたいので話を聞かせてください」と訪ねてくる人がいますが、いつまでたっても話を聞いて検討するだけでは前に進まないように思います。まず、本当にやりたいと思ったことに飛び込んでみることが大事なのではないでしょうか。

永瀧：私たちのテラスに体験に来てもらうのも良いですね。

全員：いつでも体験に来てほしい！大歓迎！

半年後、1 年後の姿は？

岩澤：「**よってけし**」3 号店ができる！思いを共にした自分の分身のような人が、新たな空き家を借りて「こんなことやりたいな」と思ったことを支援できたらよいと思っています。これまでの事業を通して得た成功体験を、これから始める人たちへのお土産としてつないでいくのが理想です。

塩原：お金のやり取りだけではない社会になっていくと、何かを始めてみたいと思う人へのサポートが大事になってくると思います。「**たんぽぽはうす**」としては、子どもたちに向き合えるような、手厚い保育を小さい空き家を使ってたくさん広げていきたいですね。

永瀧：子育て世代のママ達が、「**宮ノ前テラス**」でいろんなイベントを企画・実行していく。高齢者と子ども達がボードゲームを一緒に楽しむ姿が多く見られるようになる！

廣瀬：カフェ・配食事業が **6 丁目クラブ**の収益の柱ですが、配食はまだまだ伸びる余地があると思うので、地域にもっと広げていきたいと思います。

岩澤：助成団体同士はともすると助成を受けるだけで横のつながりがない。でも今回の生き活き市民基金のフォーラム開催を通して、お互いの活動現場を見て、話しを聞いて、活動を共有することができたのは貴重な体験でした。

～それぞれの居場所を継続し、発展していくために、今後も活動を共有しながら、励ましあい、アドバイスしあえるような関係を続けていけたらと思います。～

市民活動を応援しよう

公益財団法人かながわ生き活き市民の活動は
意思ある市民からの寄付により支えられています

★かながわ生き活き市民基金では「助成事業」を基盤として「研修・セミナー事業」「相談・助言事業」「広報事業」の４事業に取り組み、市民活動を応援しています。

★福祉たすけあい基金の助成事業は、毎月100円の寄付を原資に、毎年２回地域の福祉たすけあいの市民活動に助成を行っています。2013年の設立から2019年８月までに133団体に約4,300万円を助成しました。

★研修・セミナー事業では、社会で起きている課題をフォーラムや研究会の開催を通して可視化し、共有化し、市民活動への問題提起を行っています。これまでにも「子ども・若者の孤立と貧困」をテーマとしたフォーラムを開催し、地域課題に立ち向かう市民活動を応援してきました。

★公益財団法人かながわ生き活き市民基金への寄付によるご支援をお願いいたします。公益財団へのご寄付は所得税、市民・県民税、企業の特別損益算入が適用されるなど、税制優遇の対象となります。

公益財団法人 かながわ生き活き市民基金
Kanagawa Lively Citizens Fund

発行：公益財団法人　かながわ生き活き市民基金

住所：〒222－0033　横浜市港北区新横浜２－２－15　パレアナビル６階
TEL ：045－620－9044　　FAX：045－620－9045
Mail：info@lively-citizens-fund.org
URL：http://www.lively-citizens-fund.org/
Facebook：http://www.facebook.com/livelycitizensfund
発行日：2019年10月　　発行部数：500部

表紙デザイン：企業組合エコ・アド ／ 印刷製本：田安製本
記録：田久保薫子